

日本膜学会会長メッセージ

(九州大学大学院工学研究院 教授) 後藤雅宏

(1) 学会会長としてのメッセージ

1978年に発足した膜学会は、すでに40年以上の歴史を有する学会です。当学会の最大の特徴は、人工膜と生体膜の研究者が一堂に会し、その融合を目指して切磋琢磨する基本理念にあります。この考え方は、欧米やアジア諸国の膜学会にはない日本独自のものであり、この理念を大切に、本学会のさらなる発展と活性化を目指して参ります。当学会も昨年度末から新型コロナが、学会の運営に大きな影響を及ぼしています。年会や討論会はすべてオンライン化され、実際に対面で議論する機会が大きく減少しました。一方で、理事会や総会などはオンラインによってむしろ効率化された面も多く、大幅な旅費の節減にも繋がっています。現状を考えると新型コロナの影響が完全になくなることは考えにくいので、コロナ下におけるそれぞれの学会運営の情報を共有できたら幸いです。世界中の英知が結集され、一日も早く新型コロナが終息に向かうことを願っています。



(2) 学会の使命と現状の課題

膜学あるいは膜技術によって、人の暮らしを豊かにし、持続可能な社会に貢献することを本学会の使命と考えています。特に、世界的な水不足、エネルギー問題、高齢化社会のための医療技術などで、膜は必要不可欠な重要技術となっています。学会というとアカデミアの集まりと思われがちですが、本会には、現在多くの企業研究者も参画しています。さらに工夫を凝らして、多くの企業研究者が喜んで参加いただける学会にしたいと考えています。最近、団塊の世代の引退に伴い会員の減少が目立ってきており、次を担う若手の育成が急務となっています。一方で、定職を引退されたシニア世代の活用も重要と考えます。

(3) 現学会は蝸壺化、閉塞感はないか、最新研究・教育の場となり得るか

本学会は、サブ的な位置付けにあり、化学工学会や日本化学会あるいは薬学会などの大きな学会を主として活動されている先生が多いため、閉塞感は全くございません。また本会は、膜に関する最新研究の発表の場として認識されています。さらに学会独自で書籍を発行し、毎年、それを用いた膜学講習会を開催し、膜を学ぶ場を提供しています。

(4) 政策提言・要望

政策提言に関しては、基本的には日本学術会議の役割だと思われませんが、学会特有の問題も多いと考えられます。公益法人認定法の財務基準の見直しなどは、一学会としては、なかなか交渉が厳しいので、取りまとめとしての化学連合の働きかけに期待しています。さらに持続可能な社会の構築に向けたSDGsの取り組みにおいて、化学の役割は大きいので、化学連合には、政策提言を通じての新たな国家プロジェクトの立ち上げを主導して欲しいと思います。

(5) 化学連合へ期待すること

単独の学会では、解決できない事項を、化学に関する学術団体の代表として、国や政府に交渉する窓口になっていただくことを期待しています。そのためには、具体的に各学会の代表が一同に会してそれぞれの学会の諸問題を議論する組織が必要であり、実際にそれを機能させて欲しいと思います。さらに、このコロナ下、多くの学会がオンラインの発表システムを必要としているので、化学連合が代表して、オンライン学会(討論会やシンポジウム)の基本システムを設計し、それを貸し出す仕組み作りを構築していただければと存じます。